

## 英語の軟口蓋鼻音は音素か

小 林 泰 秀

### 1. 音素か異音か

同じ音素に属する異音は、それぞれ相補的分布をなしているのであるが、ある異音に対する条件が変化して他の異音と音素上対立することがある。この現象を音韻的分裂 (phonological split) と呼ぶが、本稿では英語の軟口蓋鼻音 [ŋ] を取り上げ、[ŋ] は真に音素と言えるかどうかについて述べたい。

英語の軟口蓋鼻音 [ŋ] が音素か否かという議論は、今日ではほとんどなされていないと言って良いであろう。ところが、日本語では、[hampaku]「半泊」、[hantsuki]「半月」、[hanakai]「半壊」に見られるように、軟口蓋鼻音 [ŋ] は [m], [n] と共に原音素 /N/ の異音であるのに、英語の [ŋ] は音素だろうかとの疑問が出るのは当然である。次の英語の [ŋg] はその綴り字からして、/n/ の軟口蓋閉鎖音 /g/ への調音点同化 (assimilation of a point of articulation) だと考えられる。

- (1) [æŋgər] 'anger', [ɪŋɡlɪʃ] 'English', [fɪŋɡər] 'finger',  
[hæŋgər] 'hunger', [lɪŋɡwɪst] 'linguist', [lɒŋɡər] 'longer',  
[lɒŋɡɪst] 'longest', [sɪŋɡl] 'single'

日本語と違って英語の [ŋ] が音素と見なされるのは、次のように他の鼻子音と音韻的に対立することにある。

- (2)  $\left\{ \begin{array}{l} /kɪm/ \text{ 'Kim'} \\ /kɪn/ \text{ 'kin'} \\ /kɪŋ/ \text{ 'king'} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} /sʌm/ \text{ 'some'} \\ /sʌn/ \text{ 'son'} \\ /sʌŋ/ \text{ 'sung'} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} /ræm/ \text{ 'ram'} \\ /ræn/ \text{ 'ran'} \\ /ræŋ/ \text{ 'rang'} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} /sɪmər/ \text{ 'simmer'} \\ /sɪnər/ \text{ 'sinner'} \\ /sɪŋər/ \text{ 'singer'} \end{array} \right\}$

英語の [ŋ] が音素と見なされるのは、(2) の語のように最小対話 (minimal pair) が存在するからであるが、このことについて Kurath (1964:15) は、歴史的見地から次のように述べている。

- (3) The velar nasal /ŋ/ is derived from the syllable-final cluster /-ng/ of ME, as in *long* /lɒŋ ~ lɔŋ/ from ME /long/, where the velar was a positional allophone of /n/ before the velar plosive /g/. The fusion of /ng/ in the sound [ŋ] brought the velar nasal into contrast with /n/, as in *sing* /sɪŋ/ ≠ *sin* /sɪn/.

Kurath は中世英語での /-ng/ が [ŋ] に融合したことにより、/n/ と音素上対立することになったと述べている。これは元来 /n/ の異音であった [n] と [ŋ] が互いに別の音素になる音韻的分裂の現象である。

もうひとつの考えは、中世英語のように /ng/ を基底形として、[ŋ] を /n/ の異音と見なすものである。[ŋ] は /ng/ や /nk/ の連続音の場合にのみ生じるが、/ng/ が尾子音にある場合には、比較の接尾辞 *-er, -est* の付加した語を除き、常に [ŋ] に発音される。次の [#] は語境界である。

- (4) [kɪŋ] 'king', [ræŋ] 'rang', [hæŋ#ər] 'hanger', [sɪŋ#ər] 'singer',  
[lɒŋ#ɪŋ] 'longing', [sɪŋ#ɪŋ] 'singing', [gæŋ#stər] 'gangster',  
[kɪŋ#li:] 'kingly', [strɒŋ#li:] 'strongly', [jʌŋ#ɪʃ] 'youngish'

/ng/ から [ŋ] が派生されるのは、/n/ の調音点同化による軟口蓋音化と語末の軟口蓋有聲閉鎖音 /g/ の削除によるものである。次の /g/ 削

除がなされる語となされない語を見てみよう。次の規則で、<sup>(1)</sup> は軟口蓋音化、<sup>(2)</sup> は /g/ 削除、<sup>(3)</sup> は [#] 削除である。

- (5) a. /hæŋg#ər/  $\xrightarrow{(1)}$  hæŋg#ər  $\xrightarrow{(2)}$  hæŋ#ər  $\xrightarrow{(3)}$  [hæŋər] ‘hanger’  
 b. /hʌŋgər/  $\xrightarrow{(1)}$  [hʌŋgər] ‘hunger’  
 c. /lɒŋg#ər/  $\xrightarrow{(3)}$  lɒŋgər  $\xrightarrow{(1)}$  [lɒŋgər] ‘longer’

例外的に比較級、最上級の接尾辞の前では語境界が削除されるので、*longer* には /g/ 削除は適用されない。その場合話者は、[hʌŋ\$gər] ([ \$] は音節境界 (syllable boundary)) 同様、音節を [lɒŋ\$gər] のように区分していると思われる。音韻形式は、必ずしも意味形式に従う必要がないことを示唆している。/ŋg/ の語末の /g/ が脱落したことを示す例として、特にアメリカ南部で *-ing* を [ɪn] に発音することが挙げられよう。

- (6) [ɪkspektɪn] ‘expecting’, [sʌmθɪn] ‘something’, [setɪn] ‘setting’,  
 [stɒpɪn] ‘stopping’

*-ing* の綴り字であっても、*king*, *sing*, *thing* などは /g/ が脱落して [kɪn], [sɪn], [θɪn] のように発音されることは決してない。それは *kin*, *sin*, *thin* と区別するために、*king*, *sing*, *thing* には鼻音 /n/ の軟口蓋音化が必然的に適用されるからである。英語話者が /ŋg/ を基底形として知覚しているのは、*strength* [stɹeŋkθ] や *length* [lɛŋkθ] のように無声化された /g/ を [k] に発音していることからもうかがえる。

## 2. 子音群の単一化

前節では [ŋ] が [m] や [n] と最小対語を形成するので音素であるとする考えと、尾子音の /g/ が脱落しているので [ŋ] は /n/ の異音であ

り、分節音の対立は音韻的ではなくて音声的であるとする考えを述べた。

本稿では、[ŋ] が音素であるかどうかという問題について二つの面から考えてみたい。一つは、語末の /ng/ の /g/ 削除は軟口蓋音に特別な規則ではなく、英語に一般的な規則とするものである。二つには、[ŋ] の表れる語末の位置が、音素の表れやすい位置かどうかを、普遍性の面から考えるものである。

次の語では、語末の非継続音（破裂音と鼻音）が削除されている。

- (7) a.  $\begin{cases} [b\text{ɔ}m] </b\text{ɔ}mb/ & \text{'bomb'} \\ [b\text{ɔ}mb\text{a}:d] & \text{'bombard'} \end{cases}$       b.  $\begin{cases} [pl\text{a}m] </pl\text{a}mb/ & \text{'plumb'} \\ [pl\text{a}mb\text{əs}] & \text{'plumbous'} \end{cases}$
- c.  $\begin{cases} [\text{ɔ}:t\text{ə}m] </\text{ɔ}:t\text{ə}mn/ & \text{'autumn'} \\ [\text{ɔ}:t\text{ə}mn\text{əl}] & \text{'autumnal'} \end{cases}$       d.  $\begin{cases} [d\text{æ}m] </d\text{æ}mn/ & \text{'damn'} \\ [d\text{æ}mn\text{ə}b] & \text{'damnable'} \end{cases}$

次の語は、非継続音の削除は単語末ではなく、語境界 [#] の前であることを示している。

- (8) a.  $\begin{cases} [b\text{ɔ}m\text{ɪ}ŋ] </b\text{ɔ}mb\#ŋ/ & \text{'bombing'} \\ [b\text{ɔ}ms\text{a}ɪ] </b\text{ɔ}mb\#s\text{a}ɪ/ & \text{'bombsight'} \end{cases}$
- b.  $\begin{cases} [pl\text{a}m\text{ə}] </pl\text{a}mb\#\text{ə}r/ & \text{'plumber'} \\ [pl\text{a}m\text{ə}r\text{ɪ}] </pl\text{a}mb\#\text{ə}r\text{ɪ}/ & \text{'plumbery'} \end{cases}$
- c.  $\begin{cases} [k\text{ə}nd\text{ə}m\text{ə}] \sim [k\text{ə}nd\text{ə}mn\text{ə}] </k\text{ə}nd\text{ə}mn\#\text{ə}r/ & \text{'condemner'} \\ [k\text{ə}nd\text{ə}m\text{ɪ}ŋ] </k\text{ə}nd\text{ə}mn\#\text{ɪ}ŋ/ & \text{'condemning'} \end{cases}$
- d.  $\begin{cases} [d\text{æ}m\text{ɪ}ŋ] </d\text{æ}mn\#\text{ɪ}ŋ/ & \text{'damning'} \\ [d\text{æ}m\text{d}] </d\text{æ}mn\#\text{d}/ & \text{'damned'} \end{cases}$



- c. Ol' folks stan' a-pattin' their han's. (stand, hands)
- d. They say there's a hun'erd thousand of us shoved out. (hundred)
- e. Then by God let 'em try to fin' us! (find)

通常の会話では /nd/ の /d/ を削除する 경우가非常に多く、/mb/, /mn/, /ng/ と共に英語話者にとっては一般的な規則であると言える。語末の子音が脱落する子音群の単一化は、二つの尾子音が共に有声音であるか、あるいは共に無声音である場合であり、[有声音]+[無声音]の連続では無声音の削除は行われ難い。

次の例も *The Grapes of Wrath* からのものであるが、有声音の連続音削除と無声音の連続音削除が多く見られる。

- (12) a. I was in Bakersfiel' las' week. (Bakersfield, last)
- b. We baptize' you in the name of the Holy Ghos',... (baptized, Ghost)
- c. Now who tol' you to come bus' up our dance? (told, bust)
- d. Hol' im under water. (hold)
- e. I kep' plenty oil in. (kept)
- f. She never lef' that pig gate open... (left)
- g. ..., an' we kin go bright the nex' day. (next)
- h. They's so goddamn many shif'less. (shiftless)

語末の連続音が [有声音] と [無声音] である場合には、次のように削除され易い [1] が脱落している。

- (13) a. Tou kin he'p me. (help)
- b. You said your own se'f you never fixed one. (self)

*told* は /d/ が削除され、*help*, *milk* は /l/ が削除されるのは、(9) の

*dump* や *sink* と同様、有声子音の次の無声子音の脱落が難しいからである。従って、次の文の *jump* と *pink* の語末の無声破裂音は、通常削除されない。

(14) a. The dog has been trained to jump/\*jum' at a rogue.

b. Look at those beautiful pink/\*pin' roses.

以上英語の一般性として、尾子音に子音群があれば削除する傾向があることを述べたが、最も顕著な例として /ng/, /mb/, /mn/ がある。/nd/ の /d/ も削除される場合が多いが、これは、類似性のある子音群には単一化が起こりやすいという英語の一般的傾向を反映するものである。このことから、/ng/ の /g/ 削除を例外的な現象とは見なすのではなく、[ŋ] の基底形を /ng/ と考えることを提案してきた。/g/ 削除を最適性理論の枠組みで見てみよう。

子音群の発音に関する制約として、次のものが考えられる。

(15) a. NasAssim: 鼻音は直後の子音と同一の調音点でなければならない。

b. \*Coda/NC: 尾子音に有声閉鎖音（有声破裂音と鼻音）があってはならない。

c. Max-IO: 入力形にあるすべての分節音は、出力形に含まれていなければならない。つまり、分節音の削除があってはならない。

d. Ident (F): 入力形にあるすべての分節音は、出力形の分節音と同一のものでなければならない。

NasAssim は鼻音の調音点同化 (nasal assimilation) である。Max-IO の I は、入力形 (input form) であり、O は出力形 (output form) である。また、Max は入力出力に最大限 (maximally) 表れていることを意味する。Max-IO により語末の子音の削除が制約される。これは \*Coda/NC

と矛盾するが、どちらの制約を優先するかは、階層の順位によって決められる。Ident (F) は、入力分節音のすべての素性 (feature) が出力分節音のすべての素性と同一 (identical) であることを要求するものである。

以上四つの制約を用いて、語末子音の削除を見てみよう。*sing* が選ばれる過程は次の表 (Tableau) のようになる。

- (16) /ng/ → [ŋ]      NasAssim, \*Coda/NC ≫ Max-IO

/sing/	NasAssim	*Coda/NC	Max-IO
a. sing	* !		
b. siŋg		* !	
⇒ c. siŋ			*

(16) で [siŋ] が選ばれるのは、NasAssim と \*Coda/NC に違反しないからである。[siŋ] は Max-IO には違反しているが、階層的に下位の制約違反であることから勝者になっている。

次に、子音群が尾子音にない *hunger* を見てみよう。[. ] は音節境界を示している。

- (17) /ng/ → [ŋg]      NasAssim, Max-IO ≫ Indent (F)

/hʌŋ.gər/	NasAssim	Max-IO	Indent (F)
a. hʌŋ.gər	* !		
⇒ b. hʌŋ̩.gər			*
c. hʌŋ̩.ər		* !	*

Max-IO と Ident (F) は誠実制約 (faithfulness constraints) であり、階層的には下位に位置するものであるが、自然言語では Ident (F) の方が、Max-IO より違反し易いので、両者が表れる場合には Ident (F) の制約が



下位になるのが普通である。

次に、語末子音が無声音である *sink* を見てみよう。

- (18) /nk/ → [ŋk]      NasAssim, Max-IO ≫ Indent (F)

/sink/	NasAssim	Max-IO	Indent (F)
a. sink	*!		
⇒ b. sɪŋk			*
c. sɪŋ		*!	*

*sink* は語末の /k/ が削除されないので、鼻音の調音点同化を行っている [sɪŋk] が勝者となる。

### 3. 有標の位置と無標の位置

[ŋ] が /n/ の異音であることを、英語の一般的な尾子音の単一化という面から議論してきた。もう一つの [ŋ] を音素として認められない理由は、[ŋ] の表れる位置にある。[ŋ] が音素かどうかという問題に入る前に、O'Grady and Dobrovolsky (1996) (以下 O & D) が述べている分節音の位置による有標性 (markedness) について触れておく。

ドイツ語では尾子音の阻害者を無声化し、*Hund* 'dog' は [hunt] と発音される。従って、ドイツ語話者は英語の *had* を [hæt] と発音しない様に注意し、語末で [t] と [d] が対立することを学ばなければならない。ドイツ語話者にとって英語の *hat* と *had* を区別するのは容易なことではない。一方、英語話者にとっては、ドイツ語の *Hund* を [hunt] と発音するのは容易なことである。それは、英語はどの位置であれ阻害音は有声・無声の対立があるからである。有声・無声の対立が起こる位置について、O & D は典型的に次のように述べている。

- (19) ・ There are languages that have a voicing contrast initially, medially, and finally (e.g., English).  
 ・ There are languages that have a voicing contrast initially, medially, but not finally (e.g., German).  
 ・ There are languages that have a voicing contrast initially, but not medially or finally (e.g., Sardinian). (O & D, p.481)

更に O & Dは, (19) を次の (20) のように一般化し, 普遍的現象として (21) のように図式化している。

- (20) The presence of a voicing contrast in final position implies the presence of a voicing contrast in medial position, which in turn implies the presence of a voicing contrast in initial position.

- (21) initial < medial < final

The presence of final position implies the presence of medial position (but not vice versa), and the presence of medial position implies the presence of initial position (but not vice versa). Therefore final position is the most marked and initial position is the least marked. This markedness differential explains the degrees of difficulty exhibited by the German and English L2 learners. (以上 O & D, p.481)

(21) の図式は, 語末に有声対立があると語中にもあり, 語中に有声対立があると語頭にもあることを表している。そして, 語末の位置が最も有標性が強く, 語頭の位置が最も有標性が弱い。このことは, ドイツ話者にとっては語末の位置での有声・無声の区別が難しく, 語頭の無標の位置ではその区別が易しいことを意味している。

(21) の有標性の仮説は, 有声対立の普遍性について述べたものであるが, 本稿では音素の位置も共通する仮説であると考え。つまり, 語末

の位置に生じる音素は、語中と語頭にも生じ、語中に生じる音素は語頭にも生じるというものである。これは、語頭の音素の発音が最も容易なものであり、語末の音素の発音が最も難しいということを意味する。このことから、音素の生じる位置について、次のような条件を提起したい。

- (22) 音素の位置条件：英語の音素は、語頭で容易に発音され、語中にも生じるものでなければならない。

(22) の条件は、最小対語の面から見ると、最小対語は語頭の位置で最も起こりやすく、語末の位置で最も起こり難いことになる。

鼻音 [m], [n], [ŋ] が語頭、語中、語尾に生じる語を見てみよう。

(23)	initial	medial	final
a. [m] :	<u>m</u> ake	com <u>m</u> on	progr <u>m</u>
b. [n] :	<u>N</u> ovember	autumn <u>n</u> al	mount <u>n</u> ain
c. [ŋ] :	——	eng <u>g</u> e	young <u>g</u>

[ŋ] は有標の語末の位置に生じているのであるから、(22) の仮説に従うと、無標の語頭にも生じるはずである。しかし、語頭が [ŋ] である語は英語には存在しない。有標の位置でその発音が容易にでき、無標の位置で難しいというのは、(22) の音素の仮説に反することになる。

[ŋ] が頭子音の位置に生じないので、頭子音の位置にのみ生じる [h] と同一音素であり、二つの単音は互いに異音であるという考えはどうか。これは、[h] と [ŋ] に共通の弁別的素性が少なく、自然類を成すことは不可能なので、別々の音素に属していると思なざるをえない。

[ŋ] のように、語末には生じるが語頭には生じない分節音に歯茎破擦

音の [ts] と [dz] がある。

- (24) a. [ts] : ——— that's it      cat's t  
           b. [dz] : ——— add zests      beds

歯茎摩擦音は破裂音 /t/, /d/ と摩擦音 /s/, /z/ の融合した音であり、単独の音素とは見なされない。更に、語頭には生じないので、位置条件に反する。

/h/ のように尾子音に生じない音素に、/j/, /w/ のようなわたり音がある。

- (25) a. [h] : house      perhaps      ———  
           b. [j] : yellow      halleluja      ———  
           c. [w] : water      Hawaii      ———

[j] と [w] は *day* [dej], *know* [now] のように語末に生じるので、尾子音のように思われるが、二重母音には [er], [ou] の発音もあるので尾子音とは見なされない。わたり音は前後の母音に移行する際の音であるので、直前に母音のない語末の [j] (例えば [patj]) や [w] (例えば [patw]) は難しい発音である。

語中と語末には生じるが、語頭にはめったに生じない音に [ʒ] がある。硬口蓋歯茎摩擦音の [ʃ] と [ʒ] の位置は次のようになる。

- (26) a. [ʃ] : champagne      machine      English  
           b. [ʒ] : genre      regime      massage

[ʒ] は歴史的にはフランス語の影響を受けた発音であり、英語本来の子音ではなかったが、現代英語では [ʒ] は音素と見なされている。無

標である語頭の位置の [ʒ] はフランス語借用語の発音であり、英語の音素と見なせるかという問題がある。しかし、英語話者は語頭での [ʒ] の発音に困難さを感じないことから、[ʒ] を英語の音素と見なして問題はない。これは、(22) の音素の位置条件に違反するものではない。このことについて O & D は次のように述べている。

- (27) English speakers seem able to learn to pronounce French words like *jaune* ‘yellow’ and *jeudi* ‘Thursday’ without trouble. (O & D, p.481)

これまで音素の条件を子音において述べてきたが、母音についても同様のことが言える。次のように、二重母音や長母音は語末にも生じるが、単母音には語末に生じないものもある。

- (28) a. [i:] : eastern      experience      committee  
 b. [eɪ] : apron      mistake      play  
 c. [u:] : oozy      smooth      value  
 d. [ou] : over      knowledge      follow  
 e. [ɔɪ] : oyster      noise      employ  
 f. [aɪ] : idea      alive      alibi  
 g. [au] : outside      house      allow  
 h. [ɔ:] : aural      bought      draw  
 i. [ɑ] : art      swallow      far [fɑ:] < /fɑr/  
 j. [ɜ] : urge      assertion      fur [fɜ:] < /fɜr/  
 k. [ɪ] : impossible      officer      kidney [kɪdnɪ:] < /kɪdnɪ/  
 l. [ɛ] : elder      pleasant      \_\_\_\_\_  
 m. [æ] : arrow      mathematics      \_\_\_\_\_  
 n. [ʊ] : oomph      ambush      \_\_\_\_\_  
 o. [ʌ] : utter      stubborn      \_\_\_\_\_

[a] と [ɜ] も短母音としては語末に生じることはない。しかし、/ɪ/ には弛緩母音の [kɪdɪ] *kindey* の発音もある。[ɜ] は /r/ の前にのみ生じるので /ʌ/ の異音とも考えられるが、ここでは /ɜ/ と /ʌ/ をそれぞれ別の音素と見なしておく。(28) の例から、短母音は語頭と語中では発音し易く、語末では発音しにくいのが分かる。このことは、音素は語頭に生じ易いものであり、[ŋ] のように「語末に生じながら語頭に生じないのは音素ではない」という音素の位置条件を証明するものである。

#### 4. 結 語

本稿では、[ŋ] は基底形 /ng/ の /g/ 削除であると述べ、有声非継続音の削除は、英語の尾子音での子音群を単一化しようとする一般的規則に基づくものであると述べた。更に、語頭が無標であり、語末が有標であるという仮説を立て、最小対語は語頭の位置で最も起こりやすいと述べた。従って、英語の [ŋ] は語頭、または頭子音に生じることがないので、音素の条件を充たしていないことになる。

しかし、音素の定義を以上のように決めつけて良いものかという疑問は残る。それは音素を音韻上のどのレベルで捉えるかによるからである。本稿のように [ŋ] の基底形を /ng/ とし、/g/ 削除が働いていると見なされる言語にドイツ語がある。Ito and Mester (1998) によると、*Ding* ‘thing’ は標準ドイツ語 (Standard German) では [dɪŋ] と発音され、北部ドイツ語 (Northern German) では [dɪŋk] と発音されている。その場合、標準ドイツ語と北部ドイツ語に共通の基底形を /dɪŋg/ と見なすのが妥当であり、標準ドイツ語の [dɪŋ] には /g/ 削除が適用され、北部ドイツ語の [dɪŋk] には無声化が行われている。英語の [ŋ] の基底形を、ドイツ語の軟口蓋鼻音の基底形に類似するものとするのが本稿である。

## 参考文献

- Cussenhoven, Carlos and Jacobs, Haike. 1998. *Understanding Phonology*. Arnold.
- Ito, Junko and Mester, Armin. 1998. "On Opacity-Inducing Conjunction: [M&F] and [M&M]," *Handout presented at Kobe Phonology Forum 1998*. Kobe University.
- Kurath, Hans. 1964. *A Phonology and Prosody of Modern English*. The University of Michigan Press.
- McCarthy, John and Prince, Allan. 1995. "Faithfulness and Reduplicative Identity," *Papers in Optimality Theory, University of Massachusetts Occasional Papers* 18. Edited by Beckman, J. N., Dickey, L. W., & Urbanczyk, S., GLSA, University of Massachusetts, 250-384.
- O'Grady, William and Dobrovolsky, Michael. 1996. *Contemporary Linguistic Analysis: An Introduction*. Copp Clark Ltd.
- Prince, Allan and Smolensky, Paul. 1993. *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. Technical Report #2 of the Rutgers Center for Cognitive Science, Rutgers University.
- Steinbeck, John. 1939. *The Grapes of Wrath*. The Viking Press.

## 「ミューズ」か「詩才」か——ブレイクの後期予言書

中 山 文

樹齢何千年を生き抜いてきた巨木は、歴史の中で幾度となく自然発火による火事に見舞われながらもなお生き続けていく。炎が根幹を焼き尽くそうとも樹皮が残る限り不滅であり、そこからまた新たな生がうまれるのである。それは発火が起爆剤となることで球果から種子がこぼれ落ち、それが土と触れ合うことから始まる「生」のサイクルである。生 (life)、死 (death)、再生 (resurrection) と時代は流れ、「浄火」の炎は新生を促すためには不可欠な要素である。ウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757-1827) の持ち出す “Consummation” も最後の審判の後、来たるべき新時代を待ち望んで設定された滅却の時であった。

【経験の歌】(*Songs of Experience*, 1789-94) の序の冒頭でブレイクが耳を傾けよ、とうながす「詩人の声 (the voice of the bard)」は、同じく詩人であるブレイクに靈感 (inspiration) を与え、それにかきたてられ彼の想像力 (imagination) は作品を生み出していった。「想像力」はブレイクにとって幻視を可能にする力であり、この力はいずれ「ロス (Los)」となって体現化され、さらにはこの男は大気に縦横無尽に枝葉を延ばす巨木となるまでに生長していくことになる。<sup>(1)</sup> ブレイクが注目した声の主である詩人は誰なのか。

「文字」ではなく「声」によって「聖なる言葉 (the holy word)」をとらえたこの詩人は古代の森を歩く者であり、ブレイクは遠い先祖ブリトン人の姿を追い求め、同じ森にやってきた。